

2016年1月24日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉

聖書：マルコ1：32-39

タイトル：「福音を知らせるために」

---

マルコ 1:32-39

この箇所には「イエスによる人々の病いの癒し、また悪霊の追い出し」などが記されている。

この時イエスのところに来た人々は、安息日の教えを守り、定めの日時が過ぎた日沈、つまり夜、イエスのところに集まってきたのである。

32vの最後に「みな、イエスのもとに連れてきた」の「みな」という言葉は、ギリシャ語でパンタスという言葉で「あらんかぎりの、1 つも欠けが無い」という意味の言葉である。続く 33vでは「町中のものが・・・集まて来た」とあり、この「町中」という言葉は、ギリシャ語でホレー・ヘー・ポリスという言葉である。この言葉もパンタスに似た意味で、「全部の、全ての、一切の、どこもかも」という意味である。

聖書は32, 33節でわざわざ二度も「あらん限りの、一つの欠けも無い」また「全部の、一切の、どこもかも」と記し、この時の状況を強調して説明しているのである。

つまり、イエスのところに来た人々とは、単に病気の人や悪霊につかれている人々だけではなく、町中の者全部がやってきた。というほどの多人数であったのである。

イエスは、それほどの大群衆を相手にし、対処されたのである。

おそらく何時間もかかったことだろう。忘れてはならないのは、この時すでに日没後の夜から行われたということである。

イエスのところに来た人々というのは、それほどの多人数であったにもかかわらず、イエスは人々と関わり、そしてさまざまな問題と病気を癒し、また悪霊を追い出されたのである。

イエスというお方は、弟子たちに整理券を配らせて、その整理券が終了したら後は知りませんとは言わない。また人数が多すぎるから駄目だとか、これでは時間がかかりすぎるから駄目だということも、あるいはとても大変過ぎるから駄目です。ということは一切言わずに、たとえ町中の者全部の者という驚くほどの人数であっても、そしてどれほど時間がかかろうとも、またどんなに大変であろうとも、人々の「求め」ということに、きちんと応えられるお方である。それがイエスである。こんなことは人には不可能であろう。もし私であったら、

これだけの大仕事をしたわけですから、『次の日はゆっくり寝たい！ちょっと午前中はゆっくり休んで、午後から動くことにしよう。・・・』と考えただろう。

しかしイエスは35vを見ると、「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」

とある。

祈りだけであれば、休んでいるペテロの家で祈りを捧げることもできただろうが、イエスはわざわざ「寂しいところへ出て」行ったのである。それは人気のないところということである。さらに、ほとんどの人がまだ寝ている日の出前の「朝早く暗いときに」、出て行って祈っておられたのである。そして「祈り」とは、神との交わりである。

イエスは、昨夜、町中の人々との関わったのだが、この早朝は、祈るべき、また交わるべき神との交わり

を求めて、人気のないところへ行き、そして誰にも邪魔されないような時間に、神との交わりを充分行われたのである。

もちろん、この時イエスは肉体的にも当然疲れていただろう。

しかしイエスは、神との豊かな交わりなくして、人は立ちえないのだ！ということ、そして人はいったい誰によって生きる力が与えられ、また本当に行くべき業、仕事というものがなんであるのか、さらには、どこに向って行くべきなのか。ということは「神」から与えられるものであるということをも明確に知っていたのである。この早朝の祈りは、そのための祈りでもあったのである。

私達は多くの場合、自分の体調、体力を考えて何事も行おうと計画すると思います。そこにはまず自分の体調や体力が先に来ますが、それは限りある、また欠けのある弱い人間にとっては当然のことである。もちろんこれは大事なことである。しかし限りがあり、欠けがある弱い私たち人間であっても、やらなければならないことがある。それが召しというものだが、それを知り、実行していくためには、どうしても誠の神との交わりが必要である。

もし神との交わりを失っていくなら、私達は自分のことだけを見つめる生き方になり、また自分のことを優先するそのような考えになっていくようになるのではないだろうか。

一つの証がある。私には、忘れられない一人の宣教師婦人がいる。

名前は中村佳代子先生。今から6～7年ほど前に胃ガンで主のもとへ召された。佳代子先生は、召される前の年まで、当時はアメリカのサンディエゴに住んでいたが、私たちが住んでいた山形まで何度も来ては、私達のためだけに交わりを持ってくださった。そして絶えず励ましてくださったのである。何度も調子が悪いということを言っていたが、見た目は元気そうなので、すぐにきっとよくなるだろう！と思っていたのだが、実際は非常に厳しい状況であった。今思えば、お腹をさすり、苦しい表情をされたことも思い出す。

佳代子先生は、自分がどんなに苦しい状況であった時でも、いつも主を見上げ、お祈りし、聖書の御言葉に耳を傾けていた。そして今、励ましを必要としている者のところへ出かけて行っては、神の信じる信仰に留まるようにと励ましてくださったのである。葬儀の時、黙示録 14:13 が朗読された。

「また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである。」

佳代子先生を通して、多くのキリスト者並びに献身者が励まされてきた。そして今、その背中を追って信仰について行く者が多くいる。私もその一人である。人には、神から与えられた使命（召し）というものがある。それを行うには、自分の体調や体力を超えたことも行わなければならない時がある。その時に、人に確信と力を与えるのは神御自身であり御言葉である。この神との交わり無くして、私達は本当に行くべき自分の使命（召し）というものを知ることはできない。イエスは、この自分の使命（召し）を見つめ、どうしても行わなければならない「福音を知らせる」ということに命を捧げたのである。

この時悪霊は、福音の力、神の聖者、イエスが救い主キリストであるということを知っていたが、それを信じ、生きる者では無かった。むしろ知っていながら遠ざかっていた者達であった。町中の人と記されている群衆は、自らの必要を求めるだけであった。弟子たちは、人々、群衆、すなわち人間の思いを代弁し、イエスに人間の思いを伝える役目をしただけであった（マルコ 1：36－37）。

これらの者達はみな、神の御思いはなんであるのか、そして自分に与えられている使命（召し）とは何か。

ということを神に祈り求めることはしなかったのである。イエスだけが、その本当に必要な「神との交わりに生きていた」のである。

38vで「福音を知らせよう。わたしは、そのためにでてきたのだから。」とは、まさにすべてを教え与え、導く「神と共に生きるように！」という教えそのものである。イエスは、人々の求めにも確かに答えてくださるお方である。しかし本当に必要なことである「神と共に生きるように！」ということ、そのことを知らせるために、「そのために出てきたのだから」と、今日も聖書は私達が誠の神を見上げて生きていくようにと教えているのではないだろうか。

ミカ6：8

「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」